



光玄山行通寺

報恩講引上会

二〇二五年九月二十七日（土） 嚴修

真宗宗歌

ふかき^{のり}み法に

あいまつる

身^みの幸^{さち}な

たとうべき

ひたすら^{みち}道を

聞き^きひらき

まことのみむね

ただかん

恩徳讃

如来大悲の恩徳は^{によらいだいひ おんどく}

身を粉^{み こ}にしても報^{ほう}ずべし

師主知識の恩徳も^{ししゅちしき おんどく}

骨^{ほね}を砕^{くだ}きても謝^{しゃ}すべし



三歸依文

人身にんじんう受がたけ難うし、いますでに受うく。仏法ぶつぽう聞がたき難きし、いますでに聞きく。

みこんじよう

しよう

この身み今ど生だいしゆうにおいて度だいしゆうせずんば、さらにいずれの生しんにおいてかこの身みを度どせん。大衆だいしゆうもろともに、至心ししんに三寶さんぼうに歸依きえし奉たてまつるべし。

みず ぶつ きえ

ねが しゆじよう

自ら仏ぶつに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆじようとともに、

だいどう たいげ むじようい おこ

大道だいどうを体解たいげして、無上むじようい意おこを發おこさん。

みず ほう きえ

ねが しゆじよう

自ら法ほうに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆじようとともに、

ふか きようぞう ちえうみ

深く經藏きようぞうに入りて、智慧海ちえうみのごとくならん。

みず そう きえ

ねが しゆじよう

自ら僧そうに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆじようとともに、

だいしゆう とうり いっさいむげ

大衆だいしゆうを統理とうりして、一切いっさい無碍むげならん。

むじようじんじんみみよう ほう ひやくせんまんごう あいあ かた われ けんもん

無上むじようじんじんみみよう甚深微妙ほうの法ひやくせんまんごうは、百千万劫あいあにも遭遇かたうこと難われし。我けんもんいま見聞けんもんし

じゆじ え ねが によらい しんじつぎ げ

受持じゆじすることを得えたり。願ねがわくは如来によらいの眞実義しんじつぎを解げしたてまつらん。

ほうおんこう

報恩講とは

報恩講とは、ご門徒の皆様とお寺がいっしょ

にお勤めする宗祖親鸞聖人のご法事です。
しゅうそ



親鸞聖人が弘長二（一二六二）年十一月二十八日に亡くなられてしばらくは、月のご命日（二十八日）に「お講」（お勤めをし、お念仏のいわれを聞き、お齋をいただく）が勤められてきましたが、本願寺第三代かくによの覚如上人が親鸞上人三十三回忌の際に、『報恩講』としてお勤めの形を整え、『報恩講』として勤まるようになりました。はじめは、七日間のお勤めだったと言われています。

一般寺院においては、本願寺第八代の蓮如上人れんにょがお勤めするように広めていったそうです。

お釈迦様から高僧たちを経て親鸞聖人まで届いたお念仏の教え、その教えが現代の私たちにまで手渡されてきました。このお念仏の歴史に思いをいたし、阿弥陀様をはじめ無数の諸仏とお念仏の先達たちの恩徳に感謝し報いるためのおつとめです。今に生きる私たちにとっても親鸞聖人のみ教えは時代を超えて響いてきます。



ごいっしょに聴聞ちようもんし自分自身を見つめる機会にいたしましょう。

報恩講引上会 次第

一〇時〇〇分

一 真宗宗歌 斉唱

二 総代挨拶

三 住職挨拶

一〇時一〇分頃

四 法 話 今泉 温資 師

いまいずみ としし

一一時三〇分頃

五 勤 行 お勤めがはじまります

ごんぎよう

先 出 仕

しゅっし

(僧侶が入場します)

次 総 礼

そうらい

(全員で合掌します)

(新潟市亀田「往生人舎」主宰)



先生のお話の後、少し休憩があります。

かんしょう

喚 鐘 (かね) の音が聞こえたら自席に戻ってください。まもなく勤行が始まります。

次 伽陀 かだ

先請彌陀 ぜんしょうみだ

次 正信偈

真四句目下 しんしくめさげ（『報恩講勤行本』一頁）※1

次 念仏

五淘 いつつゆり（『報恩講勤行本』七十九頁）※2

次 和讃

三朝浄土の大師等 次第三首 ※3

次 回向 えこう

願以此功德

次 総礼 そうらい

（全員で合掌します）

一二時一〇分頃

六 御俗姓拝読 ごぞくしやう

（親鸞聖人の遺徳を偲ぶもの）

一二時二〇分頃

七 恩徳讃 斉唱

終了後、お斎になります。お斎会場にご移動ください。

住職が拝読いたします。
静かにお聞きください。

※Ⅰ 正信偈 真四句目下 しんしくめさげ : 普段の「草四句目下」そうしくめさげより重いお勤め

普段の私たちのお勤めは、「正信偈 草四句目下」そうしくめさげといえます。「正信偈」はお勤めの「場」と「状況」によって詠み方が変わってきます。一般の寺院においては、報恩講では「真四句目下」で詠まれますが、別院や本山ではさらに重いお勤めになります。

※Ⅱ 念仏 五淘 いつつゆり

最近では、普段のお勤めは「同朋奉讃式」でされることが多くなりましたが、行通寺ではお通夜の時には「三淘」みつゆりでお勤めをします。「五淘」とは、さらに重いお勤めの時のものですが、本山や別院では「八淘」やつゆり「十淘」とゆりといったお勤めがされます。

※3 和讃 三朝浄土の大師等 次第三首

親鸞聖人はだれもが念仏の教えに触れられることを願い、多くの和讃をお作りになりました。普段のお勤めでは、「弥陀成仏のこのかたは」ではじまる

和讃で、六首よまれます。報恩講の結願日中けちがん（何日も勤まる報恩講の最終

日の午前中のお勤め）では、「三朝浄土の大師等」から三首のお勤めになり

ます。

その三首は次になります。

さんちようじようど だいしとう

三朝浄土の大師等

しんじつしんじん

眞実信心すすめしめ

あいみんしようじゆ

哀愍摂受したまいて

じようじゆ

定聚のくらいにいれしめよ



た
り
き しんじん

他力の信心うるひとを

うやまいおおきによろこべば

しんぬ

すなわちわが親友ぞと

きようしゆせそん

教主世尊はほめたまう

によらいだいひ

おんどく

如来大悲の恩徳は

みこ

身を粉にしても報ずべし

ほう

ししゆちしき

おんどく

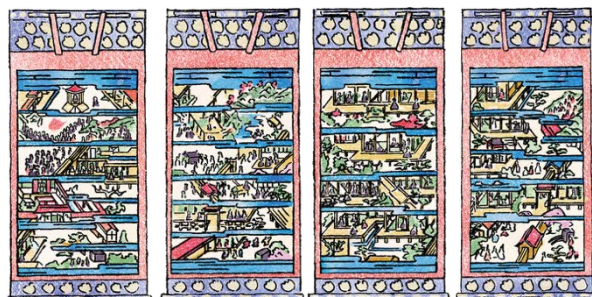
師主知識の恩徳も

しや

ほねをくだきても謝すべし

「正像末和讃」より

『真宗聖典 第二版』六一七頁（旧版五〇五頁）



ごぞくしよう

御俗姓

※静かにお聞きください

そししようにん　ごぞくしよう

それ、祖師聖人の俗姓をいえば、藤氏として、後長岡丞相 内膳公の末孫

ごながおかのしょうじよう　うちまろこう　ばっそん

こうたいごうぐうだいしんありのり

皇太后宮大進有範の子なり。また本地をたずぬれば、弥陀如来の化身と号し、あるいは

ほんじ

けしん

どんらんだいし　さいたん

曇鸞大師の再誕ともいえり。しかればすなわち、生年九歳の春の比、慈鎮和尚の門人につ

しょうねんくさい

ころ　じちんかしよう

らなり、出家得度して、其の名を範宴少納言の公と号す。それよりこのかた、楞嚴横川の

そ　な　はんねんしょうなごん　きみ

りようごんよこかわ

ばつりゆう

せきがく

そ　のち

末流をつたえ、天台宗の碩学となりたまいぬ。其の後二十九歳にして、はじめて源空聖人

ぜんしつ

じようそく　でし

いちりゆう

せんじゆせんねん

の禅室にまいり、上足の弟子となり、真宗一流をくみ、専修専念の義をたて、すみやかに

ばんぶじきにゆう

ざいけしじゆう　ぐにん

ほうど

凡夫直入の真心をあらわし、在家止住の愚人をおしえて、報土往生をすすめましき

り。

そもそも、今月二十八日は、祖師聖人遷化の御正忌として、毎年をいわず、親疎をきら
わす、古今の行者、この御正忌を存知せざる輩あるべからず。茲によりて、当流にその
名をかけ、その信心を獲得したらん行者、この御正忌をもって、報謝の志をはこばざら
ん行者においては、誠にあって、木石にひとしからんものなり。しかるあいだ、かの御恩徳
のふかきことは、迷慮八万の頂、蒼瞑三千の底にこえすぎたり。報ぜずはあるべからず、
謝せずはあるべからざる者か。此の故に、毎年の例時として、一七か日のあいだ、形のごと
く報恩謝徳のために、無二の勤行をいたすところなり。此の七か日報恩講の砌にあたり
て、門葉のたぐい国郡より来集、いまにおいて其の退転なし。しかりといえども、未安心の
行者にいたりては、争でか報恩謝徳の義これあらんや。しかのごときのもがらは、この

みぎり

砌において仏法の信・不信をあいたずね、これを聴聞して、まことの信心を決定すべくん

あわれ

しようにん ごおうじよう

ば、真実真実、聖人報謝の懇志に相叶うべき者なり。哀なるかな、それ聖人の御往生は、

せいぞつ

ごゆいくん

年忌とおくへだたりて、すでに一百余歳の星霜を送るといへども、御遺訓ますますさかん

きようぎようしんしよう みようぎ

じんこう

にして、教行信証の名義、いまに眼前にさえぎり、人口にのこれり。貴とむべし、信ずべし。

ぎやくへく

これについて、当時真宗の行者のなかにおいて、真実信心を獲得せしむる人、これすくな

ひとめ

みようもん

し。ただ、人目・仁義ばかりに、名聞のころをもつて報謝と号せば、いかなる志をいたすと

きみよう

けつじよう

しよせん

いうとも、一念帰命の真実の信心を決定せざらん人々は、その所詮あるべからず。誠に、水

こ いちしち にち

じゅう

に入りて垢おちずといえるたぐいなるべきか。これによりて、此の一七か日報恩講中にお

たりき

せんじゆいつこう

いて、他力本願のことわりをねんごろにききひらきて、専修一向の念仏行者にならんにい

たりては、まことに、今月聖人の御正日の素意に相叶うべし。これしかしながら、真実真実、
報恩謝徳の御仏事となりぬべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

于也、文明九十一月初比、俄為報恩謝徳染翰記之者也

『真宗聖典 第二版』一〇二頁〜一〇二二頁（『旧版』 八五一頁〜八五二頁）
※この「御俗姓」は蓮如上人によつて書かれたものです。

『恩徳讃』斉唱後、御齋会場にご移動ください。



【今後の主な予定】

十一月

二十日（木）

しまい講（二十日講）

二十二日（土）

枇杷島同朋の会法話会

二十七日（木）

二十九日（土）

十二月

三十一日（水）

除夜会（除夜の鐘）

午後十一時五十分より

二〇二六年

一月

一日（木）

修正会 午前七時より

三月

十四日（土）

十組同朋会報恩講

二十日（金）

彼岸会（旧二十日講）

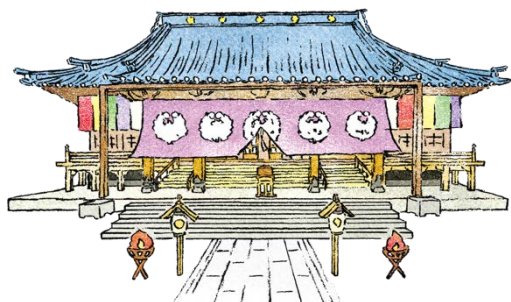
五月

二十四日（日）

新潟教区宗祖親鸞聖人

御誕生八百五十年

立教開宗八百年慶讃法要





宗祖親鸞聖人



御誕生

立教開宗

50th
800th



真宗大谷派(東本願寺)

—〈慶讃テーマ〉—



南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう